

の関係について検討した。

同時再現性 (CV: 9.8% 以下), キット間再現性 (CV: 12.5% 以下), 回収率ともに満足すべき結果であった。RIA “栄研” キットと本法との相関係数は 0.977 と高度に相関し, 回帰直線式は $y=0.881x-1.858$ であり, 本法による値が RIA “栄研” 値よりやや低値を示した。酵素法による PAP 値とは $r=0.958$, $y=39.235x+9.219$ とよく相関したが, 低値において感度の差が示唆された。Stage A~stage D (全体の約72%) を含む症例を未治療群とそれ以外の前立腺癌患者 (治療群) において各方法の検出率を比較したところ, 未治療群では 57.1% (酵素法による SAP)~71.4% (本法および RIA “栄研”) の検出率で方法間に大差はなかったが, 治療群において RIA 法 (52.8%) は酵素法 (SPAP: 31.3%), CIEP 法 (36.4%) よりやや高率であった。なお stage D の未治療群にかぎると本法による陽性率は 90.9% であった。

Control 29 例の PAP 値は 0.7 ± 0.9 ng/ml であり 2SD をとると正常範囲は 2.5 ng/ml 以下となった。

9. RIA による前立腺酸性フォスファターゼの検討

北川五十雄	宗像 雅則	三宮 敏和
高木八重子	久保 敦司	橋本 省三
		(慶応大・放)
村井 勝	田崎 寛	(同・泌)

今回われわれは前立腺性酸性フォスファターゼテストキットを治験する機会を得たので基礎的, 臨床的検討を行なった。

基礎的検討としてキット内アッセイ (変動係数 9.7%) およびキット間アッセイ (変動係数 5.1%) はいずれも良好な再現性を示した。希釈試験では PAP 値 10 ng/ml 以下で直線性が得られた。回収率試験では高濃度 PAP を添加するに従って回収率が低下する傾向がみられた。

臨床的検討として健康人男女を 20 歳代から 50 歳代まで 10 歳ごとの年齢別に測定した血清 PAP 値はほとんどが 0 であった。また, 加齢による PAP 値の変化は明らかではなかった。確定診断のついた前立腺癌 15 例では 11 例 73% に異常値がみられ, 8 例の前立腺肥大症では全例正常値以下であった。そのほかの疾患では全例が 0 を示した。前立腺癌の症例について従来の TAP と RIA を比較検討すると前者より後者の方が感度が高かった。

本法の感度と特異性をもとめると 97% と極めて高い特異性を示し, 各種前立腺性疾患の鑑別診断に有用であると考えた。

10. コーニング TBG RIA キットの検討

浅津 正子	星 賢二	佐々木康人
千田 麗子	関田 則昭	染谷 一彦
小野寺よう子		(聖マリアンナ医大・内3)

甲状腺機能診断に繁用される血中 thyroxine の測定値は, TBG 量による影響をうけるため, 血中 TBG の測定は重要である。

対象と方法: 健康者 44 名を含む, 298 検体の TBG 測定は, 固相法による RIA キット (コーニング社) を用い, 同時に RIA 法により, Total T_4 と Free T_4 も測定した。

基礎的検討: 標準曲線の再現性 (各標準濃度における CV 1.7~3.3%), 測定内 (CV 1.1%, n=14) および測定間 (CV 5.8~6.3%, n=14) の再現性も良く, 希釈テスト, 回収率 ($\bar{m}84\sim 88.1\%$) も良く, RER (勾配 0.010~0.020, n=25) で示した精度も安定していた。

臨床的検討: TBG 正常値は, 21.3 ± 6.3 $\mu\text{g/ml}$ ($\bar{m}\pm 2$ S.D.) で, 未治療甲状腺機能亢進症ではやや低値を, 治療後は正常になり, また機能低下症では逆の傾向をとった。TBG 欠損症では 0 濃度を, 妊娠では高値 ($34\mu\text{g/ml}$ 以上) をとった。ネフローゼでは低値を, 肝硬変では低値から高値のものまでばらついた。正常者の T_4/TBG は 4.4 ± 1.6 で, 甲状腺機能亢進症では高値 (8.0 以上), 機能低下症では低値 (3.0 以下) をとり, TBG 量の増減する病態では正常域に近い値をとった。 T_4/TBG と FT_4 値は良い相関を示した ($r=0.93$)。

結論: Corning TBG RIA キットは日常検査に十分使用可能である。血中 TBG 測定は, TBG 値を明確にするだけでなく, T_4/TBG を用いることにより, 特に TBG の変化する病態の甲状腺機能を適格にとらえるのに有用であった。